

せ た か む い

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十七号（一日発行）
平成八年二月一日

北海の 古平風土物語（四四）

鯨 場
土口立尋常高等小学校校長高平科に入学
担任・千葉栄信大先生 大正十四年（昭和二年）

高 橋 源 五口

先生の最も得意な剣道は放課後の特別指導として、週に二回日を決めて、高等科の生徒の中から希望者を集めて行われた。道具は、先生が自分で警察署や在郷軍人分会などのところを回り、古いものを借り集めて、いたんでいところは修繕しながら熱心に指導を続けていた。そのため、生徒たちはいきいきとして元気になった者が随分と多かった。

また、規律やしつけにも厳しく、掃除当番や看護当番、校舎内外の清掃活動も活発で、下級生を世話することにもやかましかった。

生徒には、善行をすすめて、生徒をほめることにも力が入っていたことを思い出す。

こうしたことから、私も夜の勉強をやり出した。学習参考書を使い、新品の国語辞書を引い

たり、長兄（故・小野寺地作）から漢和大辞典や地図帖を借りたり、また、先生のすすめる綴方鑑賞文選を読んだり、綴り方を書いたりした。

地区グループであった海田綱市君、健三郎君らといっしょになって、共同学習や研究・作業をして、勉強に打ち込める一大転機を得ることができたのである。

先生の熱心な教えを受けたおかげか、クラスの生徒はすっかり大人になり、苦しさや忙しさに追われながらも元気で活動するようになった。

当時、千葉先生の強い主張があったと言われる、学校では従来からのしきたりでやっていた「優等賞」が廃止になり、それが「優良児童賞」と改められて内容も学業成績だけによらず、

自分を引き上げる努力と行動力が含まれる賞に変わったのであった。大きな教育の改革にも積極的であったのである。

こうしたことで、高等科卒業の時には（古平尋常高等小学校第三十三回卒業）、学業に努力し、実行力のあるほかの生徒と共に優良児童賞を受けることができた。

クラスのみならず互いに称揚し合って、めでたく卒業式を終え社会に出て行ったことを今も思い出すのである。

風車のつしと(1)

蝦夷地の風は本土とは違いまた格別で、思っていたこととは大違いであった。私も東海道・西海道・山陽道・中仙道・北陸道と諸国を回っているが、蝦夷地のように強風の吹く所はなかった。

前に、石崎村で難船して乗組員といっしょに荷物を運んだ時などは、風に吹き飛ばされて歩くことができず、三、四回もころび、砂浜にただうづくまっていたところを船の者に助けられたことがある。もっとも石

アイヌの「ことわざ 世間ばなし集」から

崎村という所は、左右が山で、その間を石崎川が流れて海に入る。風はその谷間を通って海に吹き出すので、風も一段と強くなる。

風の強い所では鯨干場にカラス除けとして、アイヌの人たちは木で風車を作って建てておく。この風車は厚さ六分ほどの板で、直径は三尺ばかりであるが、まことに具合よく回っている。

「ロシヤ人（ロシヤ）」は、この風車を使って仕事をしているという。

余 録

千葉先生は、その後、後志・根室管内で校長を歴任された後退職し、現在は札幌市に居住しておられる。相変わらずお元気で、好きであった書道の教授、絵の指導に今でも精進されている。

私共同期生の『古平登龍会』での還暦祝いや、古平小学校開校百周年記念式典にもご出席をいただいて、師弟ともども喜び合い、お祝いをし合い、懐かしい回顧談に大いに花を咲かせたのである。

■小屋で一夜を明かす

ようやく、一軒の小屋のよう
なものを、草や木の枝でおおった
見たが、掘立て小屋であった。これです
しは雪と風を防ぐことができる
ので、明るいうちに泊まる用
意を始めた。小屋には人の住ん
だ様子はなく、山にきた時の休
憩小屋らしく何もなかった。

山から吹き下ろす風は
肌を刺すように冷たく、
火を焚こうとしても生木
なので煙ばかり上り、し
ばらくしてようやく燃え
ついた。雪の中の野宿
でなく助かったが、食糧
が全く尽きてしまつて、
一同の疲労の色がくくな
つてきた。昼は雪のため
に目をやられ、夜は焚き
火の煙に悩まされた。

中には神経の疲れから
か、嘉蔵は「山の方から
ちようちゃんを持った人が
来た」と言い、或は「誰
かが焚き火にあたってい
る」とか、山中を歩いて急

に「天狗を見た」とか「入道
を見た」などと言う者もいて、山
中で何が起るのかと不安にな
ることもあった。
寒さで眠れないまま草ぶき小
屋で一夜が明けて、五日の朝

を迎えた。

■再び溪流を下る

きのうからは一食も無く、僅
かにパレー氏の持っていた牛肉
を一切れずつ口にいられて、これ
であとは何も無くなつてしまつ
た。一同の疲労は甚だしく、口
をきく者もない。人足の大久
保という者が、雪と煙のために
目をやられ見えないと言う。そ

こで加藤氏の杖で引きな
がら歩いた。自分の体さ
え自由にならないのに、
このように病人ができた
のではますます困難が増
して来た。

■幸いにも小屋が

そのうち道端にまた一
軒の小屋を見つけた。こ
こでひと休みをしたがす
でに食糧は無く、一坪程
の小屋であつたが中で体
を寄せ合い、話の中で、
まだ体力のある者を先に
送り出し、助けを求めて
はどうかというこにな
り、人足の春松らが雪の

中を出て行った。
小屋に止まつた者は焚き火で
もするほかに何もすることがな
く、ときどき外に出て枯れ枝を
見つけて来ては火を絶やさな
いようにした。あとは良い知らせ
を待つだけであつた。

大雪に昔の冬を思い出つて

渡辺 ハツ子

この冬は、昨年の十二月に入
つてから例年になく大雪に見舞
われました。雪国に住む者にと
つては宿命だとあきらめ、これ
も自然の営みかと思ひ、老骨に
鞭を打つて除雪にがんばつてき
ました。

ところが一月八日から九日に
かけての、天変地異かと思われ
るような暴風雪で、わが家はす
っぽり雪に埋まつてしましまし
た。玄関の前が戸の高さの半分
をこえ、勝手口のドアは吹きだ
まりで開かなくなつてしまいま
した。

「さア大変！」です。
窓からも出られないし、身動き
ができなくなり、あとはただ風
雪のおさまるのを念じて待つだ
けです。
お屋近くになつて、風雪も幾
分やわらいできたようなので、
浜町に住んでいる弟と、近くの
中村運輸さんに助けを求める電
話をしました。

早速駆けつけて来てくれて、
玄関から勝手口のドアまですつ
かり除雪をしてくれました。二
軒おいた金子さんもやつて来て
協力していただきました。

「皆さん、どうもありがとうご
ざいました」

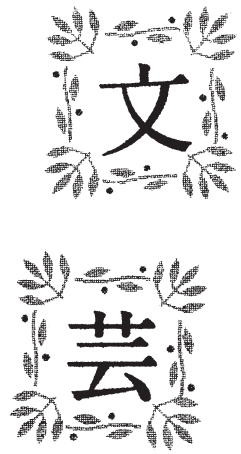
心から感謝しております。
家に閉じ込められて孤立状態に
なった私は、この度のことで、
電話の重要性を改めて痛感させ
られました。

ふつと、戦前の冬のことを思
い出しました。現在とは比較に
ならないくらい住宅事情も違
いますが、寒さは昔の方がきつ
かつたように思います。

一月の、寒：に入つてからの
シバレは格別で、台所にある手
押しポンプでさえ、濡れた手で
鉄の柄を握ると手がくつつく程
で、それで私は前掛けをポンプ
の柄にかぶせて水を汲んだもの
でした。もちろん鍋や釜の場合
も同じです。

もうこんな体験をすることも
ないでしょうが、いまから考え
ると想像もできないような冬の
生活でした。

なにか北海道も、暖冬：に向
かっていると言われて、しばらく
は暖かい冬が続いたようだし
たが、これからはまた寒い周期
に入ったという説も耳にしまし
た。



病床日記

福井幸平

私の『病床日記』も今回をもって締めくくり、また、新しい内容で再出発をしたいと思ってペンをとりました。入院した時の何かの参考にしていただければ幸いです。

わずか五十日足らずの入院でしたが四人の亡くなった方もいて、大変ショックな思いもしました。患者それぞれいろんなタイプがありますが、亡くなる方はまず食べれない。神経質で暗い感じ、たぶん家庭的にも不満があるのか笑うことが少ない。見舞客も少なく、闘病精神も希薄で何事も医者だのみ、看護婦だのみでハメをはずせない。糖尿病以外は、好きなおかずは隠れても食べる蛮勇が必要かもしれない。

医者についても私は、「俺より若いくせにナマイキ言うな」と、時々思うことがある。

「俺は俺で、ここまで生きて来た先輩なんだ」

と、これぐらいの気持ちがないと駄目だと今でも思っている。

あれこれ薬に頼るな。入院して、別な病院の薬をボコボコ飲んでるが、あれで気持ち悪くないのかなァ——。まあよくあんなに薬を飲めるもんだと感心するよりほかなし。こんな人はたいいてい死んでいくヨ。俺は、薬を飲んだふりしてずいぶん投げた。その代わり、うまいものには金をかけてきた。誰にでも言えることではないが、自分の生命は自分で守らなきゃ駄目なこともあるよ。

だからといって、いつも医者とやり合っているわけではないが、何でもかんでもスタコラスタコラ医者まかせもどうかと思う。私もけっこう仲良くやってきたし、冗談も言い合い、アンケートなどいつも引き受けて協力もしていました。

「調子はどうか？」

と聞かれれば、いつも、

「きわめて快調！」

と答えていました。

新しい患者の世話も一生懸命やりまし

た。また、看護婦さんには本当に恵まれました。定年の間近い看護婦さんがありましたが、やることは実にキッチリとっていて手を抜くようなこともなく、これには尊敬しました。若い看護婦さんは、なかなか個性的で美人が多く、仕事が終わって帰る時などはジーンパン姿に早変わり。思わず声をかけてしまいます。

見習いの看護婦が方々からたくさん実習に来ますが、さすがに正規の看護婦さんには及びません。第一、老人に対する敬語さえ満足に使えない、同僚の友達とでも思っているのか、これにはあきれてしまった。私は思い切って注意しましたが、翌日からは、ニコニコと挨拶もするし言葉づかいも良くなったようです。

少しばかり勝手な話になりましたが、病院という限られた社会で、人との出会いや人との別れがあっているいろいろ勉強になりました。

退院後、私を頼って遊びに来てくれた人もいました。むかし、古平の丸山岬に釣りに来たことがあるそうで、そこまで連れて行ったところ、

「あれッ、あの岩だよ」

と、懐しそうにたたずんでいました。帰りに新家さんの寿司をご馳走して、その

※ (四ページ・下段へ)



古平ホトトギス会

ニセコ路の寒林深く深く暮れ 大和田伊絵

荒れつづき身動^{みじろ}がじゐる冬かもめ

成人の孫の振り袖姿かな 大島喜恵

遠き子の恙^{さへ}がなきこと初便り

ロス家族お慶の電話すこやかに 山口浪

ロスの旅留守の除雪を頼みけり

新曆^{こよみ}暮れのうちから掛けてをり 仲谷美砂

ふる里の訛^{まじ}なつかし鯨汁

毛筆の賀状少なくなりにつけり 仲谷比呂子

初釜や音なき音の心かな

ペーチ力を焚き積丹の海の家 水見句丈

若水や釣瓶汲み井の山家かな

初電話久方ぶりの子の声を 木村芳園

娘の京へ夫と夕餉の鮫^{あんこう}鰯鍋

松過ぎて気まゝな宿のうたせ湯に 熊谷楠丈

蝦夷富士の笠雲みしや春の旅

寒の水八十路の命惜しみけり 斉藤波留

捨て雪の山連らなれる渚かな

初糴^{せり}の手締め目出度くひびきけり 福井幸平

愛想よき郵便局のミニ聖樹

達磨絵の展示乞われし十二月 越野敏雄

去年今年飽かじ達磨を描いてをり

お隣りもそのお隣りも雪卸 福井久美子

雪卸携帯電話掛けてをり

初風の潮の香に向け深呼吸 越野清治

一輪の色ほのかなる寒椿

『沢江に住んでいた頃』

二 題

竹内コト

〈上八部〉の老夫婦

私が子供の頃に見たひとつの情景が、今でも悲しい昔のこととして心に残っています。

当時、私は沢江町に住んでいました。ある日、古いトンネルの入口辺りで近くの子供たち、それも上学年の男子生徒が大勢集まってなにか騒いでいるのです。私も興味があったので「なんだろう?」と思って行ってみたら、そこには年をとった夫婦者らしい二人がいて、なにか盛んに口論をしているのです。子供たちは面白そうにそれを見ていたのです。

その二人はどうやら今夜、このトンネルの中で過ごそうとしているらしいのですが、ちょうど秋も終わりの夕方、その日はちらちら雪も降っていました。話を聞いていると、鯨も獲れなくて不景気なこの時に、夫婦で町内の「門付け」をして歩いていくらかのお金を貰ったのを、女の人が落としてしまい、それを男

の人が怒っているのです。

足を棒にして歩いて、今晚の宿賃はおろか食事さえできないで、気の毒というか、かわいそうな出来ごとでした。

翌朝、浜へ行ったらちようどの二人が仏壇のようなものを背負って、海岸沿いの道を浜町の方へ向かって歩いて行く後ろ姿が見えました。

「あれから、どうしてたんだろうなア」と思いながら、小柄な二人の姿を見送っていました。

後で聞いたところでは、あの人たちは『六部』といわれる巡礼さんだということでした。そういえば背中に仏壇のようなものを背負っていたし、たぶん子供の菩提でも弔っていたのでしょうか。これは、まだ私が小学校へ入る前だったと記憶しています。

◇ ◇ ◇

〈恵比寿〉ばあさん

ちようどその頃、やはり沢江町にとっても魚釣りの上手なおばあさんがおりました。早く起きて家の仕事を切り上げると、風呂敷に包んだ握り飯を腰にくくりつけ、三角ずきをふかぶかとかぶり、岩の上に立って、根気よく午後まで釣っ

前号・お詫びして訂正いたします

齊藤波留

④ 落葉焚く煙役場の裏手より
誤 落葉焚く煙が役場の裏手より

大和田伊絵

⑤ 子の新居出来六甲の冬めける
誤 子の新居出来六甲の冬あける

ているのです。腰のフゴ(籠)の中にはいつもアブラコ・ハゴトコなどが入っているのです。

陸の方から、

「釣れますか?」と声をかけると、
「今日はいあんまり釣れないねエ。潮のあんばいだべねエ」と、おばあさんが答えます。

いつも長い釣ざおを持って歩くので、あの七福神の恵比寿さんにちなんだ、いつか『恵比寿ばあさん』と呼ばれるようになりました。

海の穏やかな

日には、いつもこのおばあさんの元気な姿が見られたものでした。



平成の『雪合戦』³

先日のこと、ある会合が終わって帰宅の途中、夜の十時近くであつたらうか、たまたま家の前の除雪をしているところに出合つた。

「遅くまでご苦労さんなことだ」と思いながら見ていると、なんのことはない、自分の家の前の雪を隣家や向い側の雪山に吹き飛ばし、道路一面に吹き散らしている。一度降つた雪が二度降るのか？なるほど——、たしかに自分の家の前はサッパリしたろうが、これじゃ隣や向かいはそのトバッチリでとんだ迷惑。年始めの大雪で、家庭用の除雪機は好調な売れ行きだとテレビでも放映されていたが、こんな調子でやられたらいったいどうなるんだらう。

向こうの雪がこつちへ来て、その雪がまた向こうへ行つて：：か：：。これではまるで雪のキャッチボールみたいなものだ。

火野葦平の『糞尿譚』という面白い小説があるが、ふっと、それを思い出した。

主人公の彦次郎という日ごろ温厚な男が自分の仕事である糞尿の運搬をしていた時、相手の無理難題に我慢できなくなつてとうとう怒りを爆発させ、糞尿を相手にふりかけた、もちろん、自分も頭からどつぷりとかぶりながら——。

※ (1ページより続く)
あと禅源寺の五百羅漢を案内しました。この度、一緒に退院した方が亡くなられたという便りに愕然としました。やはり人の世は無情なものです。しかし、賀状の追伸に「元氣な福井さんを思い出しています」うれしいことを言ってくれてありがとう。

バス停で、あるおばさん同士の話、
「となり近所と、雪でケンカしてるウ」
よく雪との戦いなどというが、これではまさに『雪合戦』である。

去年の九月五日に退院してから、一日も欠かさずに六キロほどを走ったり歩いたり、これで足の筋肉が十分新しくついてきたようです。今のところほどほどにスキーもできるし、屋根の雪も降ろせるし、ということとで、現在、自分の勝手な判断で月一度の通院も止めています。煙草を止めたせいとか、三キロばかりふとつたのが気がかりですが、なんとか夏までには削るつもりです。

北国に住むかぎり、末永くつき合つていかなければならない雪。じゃまであればどこかへ運んで行くか、その場で解かして処理するしかない。

最後に、お見舞いや励ましの言葉をいただいたり、本当にありがとうございました。

◆ ◆ ◆
この記録的な大雪を詠んで、タイムス川柳欄で活躍の方がおります。

◆ ◆ ◆
こんな時でなければ書けないが、家内や娘、孫などの愛情をしみじみありがたう思いました。鬼の目に涙？ 皆にありがとうございました。

入 選 《秀 逸》

(一月二十二日) 北 政 道
道民の不満の上に雪積もる

(一月二十三日) 渡 辺 ハツエ

ひたすらに雪に負けない雪を掻く

× × ×

決めしこいま吹雪くとも万歩計

遙かなる故郷の思い出

丸山沖の鰯釣り

義 春

[17]

しばらく海の中をこずいていたら当たりがあつたので、引き上げてみたら五十センチぐらいのギスカジカであつた。このギスカジカはみそ汁にすると最高にうまい。驚いたことに一匹釣れたら、そのあと次々と面白いように釣れだした。こうして二十匹ぐらいも釣つた頃、ようやく潮が動き出したようなので、勝男さんを起こしたが、私の釣つた鰯やギスカジカを見てもあまり関心がないようだった。プロの漁師は、今日は、鰯釣りと決めたら、外道の魚には目もくれないらしい。

私も鰯釣りに切り替えようと思つて仕掛けを上げたら、またまたギスカジカが食いついていて、針が完全に胃袋の中までのみ込まれていた。頭を抑えつけて強引にテグスを引っ張つたら胃袋が裏返しになって口から飛び出してきた。よく見ると、十センチぐらいの黒い絹糸のようなものが五、六本くつついていて、見たところどうも海藻ではなさそうである。

「勝男さん、これなんだべ？」と、聞くと、
「あつ、そいつは……土左衛門の髪の毛だべ——」。ギスの野郎土左衛門食つたナ」
「ワッ——」と思わず叫んで、仕掛けもろとも海へドボンと放り投げてしまった。
びつりしたなア、もう——。
驚いて海へ投げた仕掛けが、途中で妙に止まつてしまつたように思へた。どうしたんだらうと、テグスを手にとつた途端、すごい力で引き込まれた。ぐいぐいと引いてなかなか上がつてこない。勝男さんは、
「どうした？」と言つているが私にはよく分からない。
やつと上がつてきてのを見ると、海の中でキラキラと光っている。
「鰯だッ」と言う。
「ヘンだぞ。何も餌が付いてないのに……。ギスの胃袋に食いついたんだ！」
鰯は、勝男さんが舟へ引き上げてくれた。上げて見たら、約八センチはあるかと思われる

大型の雄の鰯であつた。見事なものであつたが、土左衛門を食つた鰯だ、あんまり気持ちのいいものではなかつた。
その後、三時過ぎまでねばつたが当たりがないので、これでも帰ることにした。
舟が防波堤の函の浜に着いたら、鰯もつこを背負つたおっさんが話しかけてきた。
「どんだ、いっぺ（たくさん）釣れだがネ」
「ウン、たいしたごどねエ」
「ホー、鰯も鰯も、タコまであるんでねゲ。これ俺サ売つてけねべが……。あしたの晩、人あずまるんだども、なんも魚ねくて困つてだごだ。全部買うから売つてけれ。すぐせんこ私いうから——」
このおっさんは、畑の方の人らしい。勝男さんと相談して、全部売ることにした。ギスカジカは気持ち悪いのでみんな海へ捨てるつもりでいたが、おっさん、ギスを見たら、
「ヤアヤア、ギスのみそつゆ、何年ぶりだべ。たいしたうめえもんだもなア。食えてエ食えてエと思つてだごだ。あしたの客にも食わせてやるべエ」
いまさら海へ捨てるわけにもいかなない。勝男さんは、



——終わり——

《束引網》と《交差系網》の対立

網切り騒動 1

蝦夷地のことが次第に知られるようになって、新しい天地を求めて海を渡って来る人も多く、鯨漁を中心に「松前の春は江戸にもない」と言われるほど、松前・江差地方は賑いをみせた。

しかしその後、道南地方での鯨の漁獲量が減り始め、生活をおびやかされるようになった漁民は「これは西蝦夷地で大網を使い、鯨を大量に獲るからだ」と思いこみ、安政二年（一八五五）、数十隻の舟に乗った数百人の漁民が西蝦夷地の漁場を襲い、大網を切断するという事件が起きた。これが世に言う『網切り騒動』である。

この事件は、松前藩が置かれてから蝦夷地で起きた大きな事件の一つであったが、騒動のおさまたつたのが古平であったということから、どんな事件だったのか、その当時の様子から、原因と事件のあらましについて紹介する。

▼鯨漁の始まり

本州から蝦夷地へ渡って来た人たちの生活の目的は、その多くが海岸地帯に生活していたことなどから、まず漁業であり、その後の状況から見て鯨が主役であったと考えられる。

しかし、はっきりとした記録があるのはそれから大分後のこととて、文政四年（一四四七）、

陸奥の馬之助という者が現在の松前郡白符村（現在の福島町）に来て鯨漁をした、というのが最も古い記録とされている。今から五百五十年ほど前のことである。それから約百五十年後の慶長六年（一六〇一）、爾志郡

突符村（町村合併で現在の乙部村）で鯨漁が始められ、十三年後の慶長十九年（一六一四）には、西蝦夷地の小樽内で鯨漁が始まったとある。

▼鯨漁期の町の様子

元文四年（一七三九）に出た『北海随筆』という本には「鯨漁の始まるこの時には、武士をはじめ松前中の人たちは、老人から子どもまで上下に関係なく鯨漁にとりかかり、秋の田畑の

取り入れの忙しさと何も変わらぬ」とある。

また天明八年（一七八八）の『東遊雜記』には「蝦夷や松前の人たちは、鯨で一年中のすべての生活をまかなっていて、鯨の来る頃には誰彼の区別なく、医者や坊さん、神主さんまでが家を空け、人々は浜に小屋を建てて人に負けじと鯨を獲る。男は海に出て、女や子どもは陸で仕事をし、それで松前では田畑の豊凶などは関係なく、鯨の多く来る年を豊年といい、鯨の少ない年を凶年という」

会※（いりあい）で、大網の使用は許されていなかったのに、刺網漁業であった。

▼刺網と大網の対立

和入地以外の蝦夷地では、場所請負人たちは利益を上げるために大網を使用していたが、前浜でも年による鯨の豊凶がはっきりしてくると、西蝦夷地で大網を使用しているのがその原因ではないかとして、和入地の漁民と場所請負人との間に対立がはじまり、ときには衝突が起きることもあった。

※「入会」 本州の山林などでこの習慣が多いが「入会漁場」というのは、特定の漁場を一定の地域の漁民だけで使用しているもので、昔から守られてきた権利として法律でも保護されている。